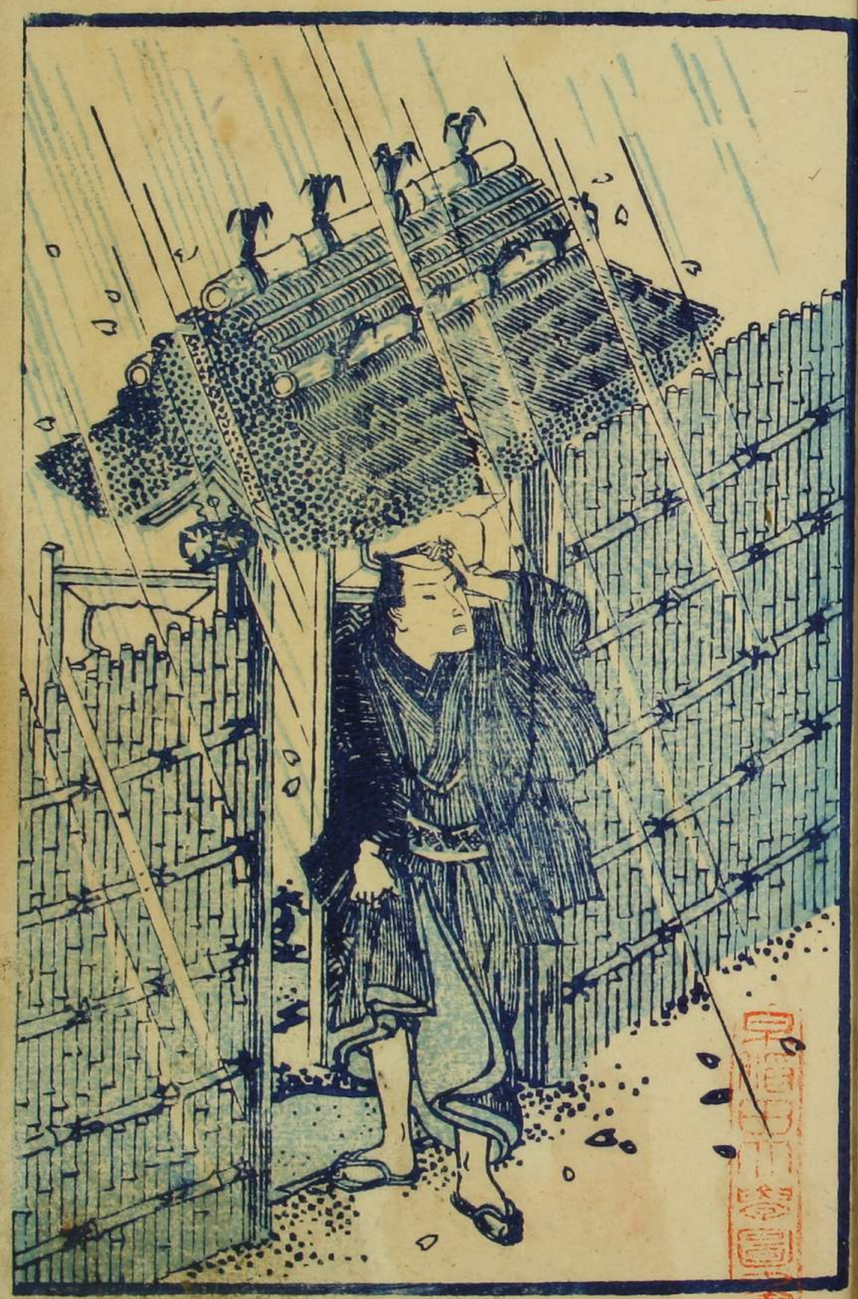
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



へ 13
2725

へ 13
2725

故
横山有策氏
昭和四年五月
寄贈

吾嬬はき雨初編序

良禽擇木而栖を害む人い情の下往て俄ごりの雨を志ろぐ一樹の蔭恩愛平。

乳松の異見みゆるなるの種より常品蠱惑

さぐ一河の流結婦多夢ゆ緣語成とりる。

艶形より高嘉の歌人目盜もひんのよ況。女寡み

常世渓遊樂寓年とぢめる。金剛山下老

寓居よあり。爲永春水子ご筆成をあく

吾嬬の巻而と題号りたる。貞趣の稗

史ち好色といとそぬ著述の草稿。まぐく實

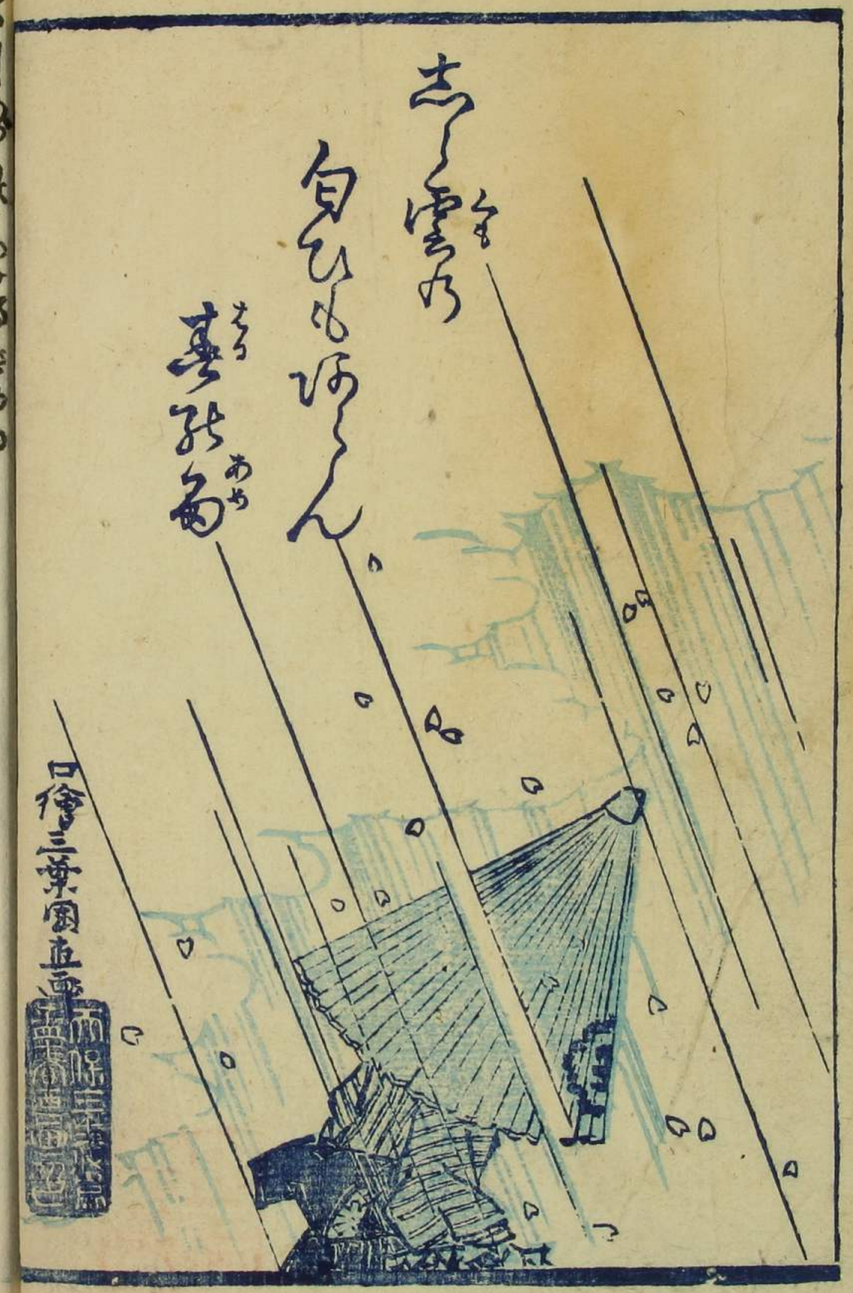
情信意を解志ありて。紫版布をる書の物帖

世序を模索頻杖を。机下ゆ ゆ ゆ

あらし強ト志のぶ

琴画舎

英賀



松間の花情吾嬬の春雨上

江戸　金龍山人　著

○

「あけてあれとふこゑるまでもなくまどをきて
かゝれとをとのなんと云う。」ト喚くいとしらの吉原
八景「ハテナ　時雨さえとだち音ごゑ人とイひ
車へ露ゆきぶ　竹の根岸の隠居　雀屋のうえ
うゝ　ゆきまゝを　横丁うちの　春雨の音ゆゝ

川ぶみ浪〳〵そく。所行の松ふみ雲かゝく時雨が
岡と名のみぞ〳〵ゑる。折〳〵年度の隙ふの中一二某
縁ゆめく縁側ゝより表をのぞき　女「さらや
ぞのゝ門ふ　おいでゑるぞやアゑるのゝさらや。
ヤホン二さらハ使ふ門ゝ　ゝけトいひゑるゞ〳〵
座下秋さのく花石づゝ　折戸を開く「すく
ゝゝゝゝぞんじ申せんゞ。マアとら〳〵ゝなゝり
ゑるさんゝ。其形でハ雨をおきのぎなゝる

とゝハ出来申せん。内遠慮ゑ　ゑ〳〵ふとら〳〵へと
いゝハ年齢廿歳だゝり。女房ゝ妾ゝ開女
ゝ。ぞゝゝと　まゝゝの　ゝゝゝまゝ　ゝくゝゝ。とゞゝまゝ
憂愁ハ。座ふさゝりの花も差ゝもおゝゞぬ
ものとゞふ。ゝゝ　ゝけらゝまゝ〳〵げふ。
さゝる男ハ三十字　夜裳の好〳〵おゝゑゝく。
いゝゝくのゑゝさ人ふゝゑ平ふ新風見あハせ。
ものいひゝゑる　ゑの　痒。浸蕩ゑ〳〵ねど

縁の糸。月下老人のこぎるるる。俳諧の元
たる縁端の。腰をうけて彼おとと「さるる
るるどもどもすとしどめん下さいまいトふる
来る空飛住しげる。縁る顔飛見ぬふり
みく。横目づひの家女桐火鑑飛端近く
持のごし　女「りへ宝めくあちくお意の
ぐあるせうのみひるんる形の雨舎りで。
さぞおひが世化せうお氣のあるといひる

ぐ。完ル笑ふ。昭男とろしの紅
りるもの。そましやのそそるるるる客舎
釈ふ感じり「イヒくどよいさくそんる
るのしるるるい男のうくでどぎりません
トいふ拵しも。すこ一ト宮きり車壁をるぐた
大雨ふ。女ひとを沼ぞ縁側より。うくみあぐ
見べ吹ろる。凹の風のさるくと指の
花飛二三つん。陸ふのうちく吹いる、宅るの

女おまき「アレモウ ぞへ いとそよ。花だろうろう
嬢〜の。所が産婆ふるまと申すまでくいのそごと。
獨りごとをいひるづくしの。障子の紙ぴつたやり
建つけく　おまき「ヲヤ所が。コロクいのでるろ
つと所ぐろ〜ぞへ花もてへへ吹こむすいト
ひあり げるおまきづ言葉男も ひとためけ
ど。関ぬよみすふもくくろ〜く　男「イヤモウ大
きふ用所ぬ みろり ゆ〜〜く お氣の毒なぞへ

ぞふうまんねろまきぞみ。すとこ〜の間少産婆を
ト。お紺戸こどんの後藤の羽織をどもあん
ろまきいと脱すてる。上ろのそへ ちろ〜の戸棧も
開ぐでぬ黒くほの紺三寸すぐ。下ろへすとこ〜ぞ
ちりと赤の糸ぐ〜の紅梅織小紋いこ〜
昔形すぐ三千寸のお紺戸ろ〜〜常八袴あ
本物ろ 羽織の 柳ろ糸 みぬ。徳吉花菱織のれ
ず。黒糸ぐろりの三本すぐ。ろでも遠ぬ

衣裳つきとまふだんして持ものも言葉
ゑ〜ざらんありけり。おまきさんすとーさる
まとく居り　まき「あゑ〜こんどのこと見るのこと
ゆめごろ〜。先刻〜考へくありまいぶよ
も志ゆうと思ひ　男「こりゃこりゃも
先刻どろ〜おまへさんを。ここで見かり
やこと母ごと思ひく　まき「さて
ざまするト里言葉。ひづのく言葉〜方法
でございまいぶつ〜つけるぐ〜仲の町の
揚屋ぐ見うけやこと　男「
さてハと思ひ　男「さてよ〜そよおつ〜れ
ば私も　まき「さ〜〜三浦屋の浮雲さんで
どざいまー〜さま　男「イヱさんの食合く
二三度いろことも　まきありまー〜ッけ。いま
おやゆ　さつぷりまいりません　まき「うそを
おつきさいまー。おまへさんあるの浮雲

さんが里花さんと大めがありまして。このを
よく知りてあるまして。あまくさんの源さんと
あっしゃいますぞらへうちゃ〜〜〜と
るゆと思ひます。アノ時ぶんい万字やふ
あるまま〜〜〜。度く桐屋ぐお出舎やて
あることとて近ふ有りやすんが。蔦雲
さんとい寄みあひやくいさ〜〜まま〜〜と
聞く男も思ひいざ〜〜派「ヲそまく。あく

教へざ〜〜。おまへい万字屋の玉菊さんざら
けるまま〜〜ゆんみ縁といふものへおろるあぞ
いろ何時ぞでお目ふくるるも初まかんん
ゆんでざざんいすぼる廓みなてまぶんうう。
面白そうるお方とい。新造衆やるみうと。お
ゆくさばやうとけまど蔦雲さんと深ひお方
ゼ。知りてゆどいもおうとみるる〜〜。どのよう
み思りても。おまだぬとてあきく〜みくあるま

まゝ〜ふゝゆ門兒ゑ〜。とれゑ浮氣も
ゑいゑんごとゝいつゝものごゝろ〜取まゝ〜。髮
なゝ上田の相ごゝん。佐ろけの裾紙ろろく色
ゑゝ。ゑゝゑつなゝ〜ねゞと素ゑゝいろゝ〜開ゑ今も
ゝゝらゝ〜ろ白ゝ素地の唐更紗紙下ゑゝゑゝ色。
紺博多の巻帯ゑろゝも上ゝゝの半襟羽織
ゑゝへ白粉のゝゝゝ深ゝろも他ゝ見えゝゝ
で男が袖ゝんがあるべろ〜ゞとゝ風俗。扨

ろゝ新妻がゝろゝゑ閑居の住居。いろゑる
ゑゑゞゝゝゞねろゑゑ。ゑゝゑい大家の歴〜なり
ろゞ。親門金石鉄ゝゝ進とゝろゝ人ゝゝ深く
ゑゝ猛言中上〜ゝく。ゞ悪ゝも門ゑゝとゝり。
その妻ゑゑゝ門茶ゞゞひゑゑり。浮沈ゑ迷ゝ
そのゝゝゝ。母親のゝ大病せんゝとゝく。
在北里へ勤ゑ出ゞし〜ゞ。そのゑゞもなく門本
家ゝり。先君病押ゝゝゑ。當時幼君の門代と

ろくさまし。しが。ひぜんの国おみのりし。金子五拾
の。こん。進ん。忠臣義二の傳ゑり。其妻子まで追
ちつとぞけらさまし。しと。甚ものしく不便の
いとうゑり。早くとさまを召ゑうし。其子孫
助。しとへ。孫子かうとも家来職となし。
忠臣の亡霊をゑぐさむべしと本願安堵の
けうが。此おまさがしとめみ鉄ハ姉ゑる家。
其の病気その男の貧苦すくハさまし大

勝の。すこしもうちすくおくべうべと。おい
入の町人大阪屋源兵衛のみ家の
しとて。廊下いぐせしが。一度湯殿へ流し
男の何面目みのめしくとお屋敷へうくる
家中の人の顔をあハさるべうや。弟の男も
大うこハ。しとみるゑぬものゑまべ。関ゑる
所みひとり住しく。世をすぐしとうをも
母と貧へやつうハしくゑまべ。いろやうみも

ぢやうせ〳〵ろべ〳〵と茶をのんで。何でも不足なく暮さるゝ〳〵を源次郎ふ
ぜんがうしが。さてハテ大坂屋さうしの選
きこゝろことがひもあるゆゑふ。うちとけうねて
居るをり。茶屋ふちやうこんのちやそへく。
十六七の娘「ハイ お茶がぶきやうしまして」
おころさん。おまへいさうきゝ宅へあるくりでん
ろうろ〳〵「ハイそまうかまうかまうか。
お客さまのどうへすゆゑ。直ふ四畳ふく
茶をとこらへてありまして。
氣がつかずおくまざねへ。サアモシあなた
茶をあがりなさい。私へさうぞう氣がつ
るんざ。源次郎へ茶をのちいでし娘
見るこゝろびつくりせしが。娘も男の顔をそ
まやとまぶんのひろけつて。おまさがくるまを
思ひてや。お茶をあがつて何ごみがあるとのひまだ

らしく次へ立ておまさは氣ぐりを見て。
ふりく　まき「あるとあのをどぜんどく久
源「さこうサぞのう見てさとよる　まき「漆の家を
ゐい。うハいてゐぐあるまたョそしてどと
う梅我み似くあるじやうあるませんう源「ぞ
いぶんいてゐぐどぎれゆた。代千郎う久　まき「バイ
ちをくでどぎれまたが。大てい此方みだりう来
て居ますたが。かりれそのさいろく菩提
あく。そんみ喜まとる　こうりゐれ弟のう人ぐ。
私の妹さん　くとやて　ちこいやたうこさ
くしも女の兄弟いゐ。こぐのみかみうり合
さいふ相殺ぐおるやたが。あのをの伯母さん
さいふものが胸のこくゐれおくぐうう時く
減殺とぐ　しく　悔　ぐりまたト問ぐと
つもあのそぶり。洗みその日まくまちく。
入相の陸きこ　まとば。ゐゐ　ずと源尺市陸

をあけ〳〵いく〳〵どの。小ゆまぬ兩のそら
ゑぐめ嘗〳〵てぞ居〳〵

第二回

茅屋の家根の音もるく。いとまぬゆふぬ
かゝる。軒端のちろき垣根ごし。淮ずさゝ
ろ三味線の。調ふるをしく湯ゝをきけば
世はゆかのたとんあ川きのの子ら人人
の願とかりうあとさゝえどころ　まき「ゑんみ陰世の

人ゆいろ〳〵みるものぐありまはれ。翠
さんもちろと知をくゝてゆろ〳〵とるさいます。
どのせこんるふ陰まはろ〳〵〳〵ト。ゑめくゐ〳〵さま
ろ〳〵〳〵〳〵。物ゝとはまをるあどけるさ仮
かゝ〳〵の種をまき。うちさけさをんと知
せく。風情をれまはまさふ見。ゐまてと初舎の
どとくゝく。すべての物ぐまふつゝば。そゞく
ちるゝの間ろう　姉さんへく「アイヨ

うんざへと。いのつく陸奥のそろへ出まべる
あへ〜こうる酒屋あるもこうぢ五斗蒔も無のまき。
酒のうんさへ招もこうく　こうて「とまでもあげま
せうう　まさ「あつまうぐ〜こうとも
あげようこうと。二人ぐ〜まつぐの酒屋を男
のまへあさ〜いぐせば　源「イヱとまでいどよ
もお氣の毒。まつとふ先刻くく長せいこ〜
ていろ〜　まさ「イヱ土うんのありあいせ。
おまぐうう〜うどぐこはやしと。とまこうあまき
おこうろ。源沢市。三人つく酒のさのこうろ。
こうまま〜表へ二三人。とぐ〜と入来る
やうをふ。おこへいろけ出んまべ。なるうく毒
にむ二人づま。おまさが屋敷の母親と一人か
わく〜あそびに来る。桜川芳雀なかろ。おこう
へ美へろけまきく。おこ屋敷のおうくろさのが
い〜ッしやのまし〜と　まさ「ヲやく〜そまとへマア

ぞんじまして今日はおじさのようにお一人で「はて
若者さんが出て一所でどざいますというを
きくとたいのごさを。源「源氏の中にあるようなひろい源「若
さんとは櫻川のようにて「ハイ源「どうぞ
ようさしをおあがりでるいあんというをうば
ちゃあがりまべ「さあ人をるべと二間わるど酒
しあるうこの四畳敷。明めきとるふくいる。
おきとるうこの座きみうちちせ。酒の
座具をうとづけるあぶもあるわば。桜狩ハ。
ようとをうんく「ヘヘ」おかぐがありうこのうと。
間まうくおまさも間がうるく雨舎りせ其
人ふ酒を少しうこというまもせぞまきイエ
ヱ。おかぐでハあるません。よくおかるさいう。
あうく雨ぶ降く。さぞおとりうるさいま
たらん。サア若者さんとうちちよくおぞ極。
今見ハどうしくおあさんと四間をうるうこ。

き「ナニサ　出るだろうゝゝ。ようこそ氣を
もんで居るあへ。ひさゝゝをちらまてさうゝゝ　ナニ
ゆうこそんるのは苦労ゆ　あそびをのでどざり
ます　若「イヱまア　あの業ぢゃるものとも
でハどざいません。時ゆ　今晩ハ　今堂さゆハ
ゆくおよだびこと　きゝも　き「ようつく
おくまろ　嬢ゝのわへ　若「おくさんのおゆへ
ハ嬢ゝうゝうゞ。私ハちゝと　き「アナサまあ人
ぎゝことをおのひでるい。ようこゝハ来も爾も
おゝろさんう今ゆ　おまへの嘗をして　若「そ
ゝハありゞこと。ゝゝ今ぢんハすぐゆる
ゆを　ゆ　ゆらまゝゝゝ。お嘗だへもい
たしません　き「ゆそんることをいつくるん
みゝゝゝひと思ゆ。ひゝ久ゝぶりで　ゆおくの
だとゝゝうるショ　き「ゝゝまハゝゝろおのゝハマア

あつたり子供の世話ことをいつて居るヨ。

それまでごろうすゑじう寄じらましたら「張」エ

モシあなたがたまおろしやるをきゝくつらしく

。てよろしうござりますせん。イヤお供と噂ハ飯

ます まき「お店衆の人 まく「イヤく今日ハ

あのんで宅を出さ由家チヨイと町人の実のあ

終ろうぐきよ左様べ漬一人つまでく大坂屋を

けりく。それろうきまを帰して大路の義益を

頼んで。若者さんとこへ来る所すがら。あ来

ありく途中でこのんござりう 若「さぞれ

きよくりぐござんましくらよトいひりく

傍まへ勘さ加を久さんとするをれ望

ハ奥の方よりのぞき出来り。るあろ若者ささ出く

若「ハテ子イヱよくござんまして。マアくとまへへ

ませうト噂やと供を久を由家 ミろ「ヨヤそれ

でも 若「ハテよくござんましたト。むすめ手を当て

風流ハひとさまざまにさぶく思あんとうんてさる
おもろ　ろ「そんるること〳〵しい　ろいろ。
どめぞおまへさんよ。　若「ぞふ女郎
どへるさいまし〳〵と　ろ「宿へまるをやこぶ合
でんいうくりやまいまい　若「そまでハおまへさん
ぶ四遍ごろト。元の産業へまきけまぶ。お
やさおろハ蕎麦ろく いろぢもるく 仕方
ろろちし〳〵。やくのてふく酒さるを持

ぶ。　ぶと　若「蕎麦をもてるに　おぶ〳〵くありて
若「イヱモウ　お産しきるる〳〵　仕方もるものが。チト
ろぶがやくぶぶ　おろもるふ　ねぶひやに。ふふ
今晩ハおまさんふまで　めふおねぶりぶど
さいまぶ。出関すぶるものとこと〳〵しぶ。
此産ハすこしもうどきやせぬ。ろどくいろても
おろ〳〵くる。まふどふも　社地戯場の。
勝元ら〳〵そ　ち「ちろくろまハぶいひきや

せくらんるせん「ハイ〳〵イヤモシ冠字ゑ俗
もるふらいつまんでやませうが。外のことぞ
ござんせん。あるとのお角のうへ御袋さま
のおつしやるゆハ。サテ子孫孝や。親のこころを
ふ知り〳〵ずと。着〳〵の〳〵とへござ。根岸の
あまさま今もりく亭うへいやご男ハ
きらひごとだらりいりくみるが。一生それ
でくくさまるものでもるゑ。尚人くとをの

氣でも。おのづゝ人ごへ廉よ。まとこ
孫のわ。千年親兄弟が達者るうちハ孫の
ゑゞいうちちゝハどんるゑ達があるまいもん
でもるゑ。せのく。おまゞ達者るうちお母さま
者をいまるよゑ。そまこだらりが氣ようる
と。お母さへあゞる度毎。あるとのおうへさゞ
出るゑとゑハござりませね。ゑとくしも義さま
者ごらいとさぬまへうゝ。うゝござるゆ。縁で

親旦那のはなしをきゝて。おもてをあらためて。廊下にて。拾ひ上げ
たる。やくそくの。ものをうけ〳〵まゝ。海のおもてをゝ。どのゝ
モシ。お袋さま。だらしやうもなく。どぎまぎ。
ものゝ。ことばが。若者が。一生の。お願ひでござり
ます。ト。猛くも。信実の。義者ふやうまる
男氣の。頑母しくも。ものゝ。ちからをゝ。ねり
ものさんすと〳〵。うつむいく。あたまの。

たが。この黒つぼ。けん。ゆをさしこめ〳〵。猛ふうと。「ヱヤ
モシ。出過ぎ。ありがゝ。おろうさんの。おろうさる
ものゝ。ことばを。ふいて〳〵。ものをうゝ。お業ぐ。あてこば
ものゝ。ことばを。しくるうの。おろうが。おまさの。顔乃そ
ぐ。ものゝ。ことば。沢山が。ものゝ。ことばを。笑顔の。面相。
おろうが。さとり〳〵。黒くべ。おまさも
ものゝ。ことば。すと〳〵。さぐろう〳〵。
ものゝ。「ヱヤ。おろうさんるぞ。おろうひざ。ト。のゝ。義

つくづくと考へる。心のうちゝ推量しるく。さてゝ覓がさて。ゆきて。雨やどりの男とて。出来の作のうぶ毛をいつくもおそぎざりしと。心のうちゝ笑ひくるる。

簡潔の作者の清吾嫌春雨上了

文明世説 武野績談 大本五巻 狂訓亭撰

松竹梅乃深山ゆき 江戸屋子陽寫顔衣 全六冊

為永春水作

松間花情　東春雨中の巻

江戸　金龍山人著

第三回

さても源次郎い山家にねまきとこそ変寄しに
出もようべわきかる花の雨えいとうれて心ゐ〳〵ざ
一間のうち独ぢく〳〵やうげふ世の中ハ敵々小
うぢりゆくものゑ〳〵我と己ぶ身をさへなりとゝ
ねのハなるまゝ今敵ハ飛鳥の花を見んとて出

るめゞ夜桜をまとゐる心にうつり爰ゆく雨又
降れべりのいゑ花のゑゞ〳〵ゆりこゝを心を移すと
浅ましかりる凡夫うる彼寂明寺のれ寺に

くゝびゝ　おもひきざめくゝ　ゝれらん
　　おもむきゝ　花ゝん　なり　けり

とみゞゝ　おもゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一の額に

世乃うゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

東の中

若葉 まぶしめしいなまの山こう秀

八橋舎調 ハテナ ありやたしーら 古人庭訓舎の連で

秀逸の タイ人ぐ 此うさハ中ふも妙案ごイヤる

おも 月のうへにとたいろるとばいろく ふなんド

ヨびする小庭ーら人菓子と茶式たづさ人隔紙をぬ

ておろい氣の毒そうに うへアノさるるどれ ちるの

るぬそうやまーうれど 保へ古くよへございまるとと 坂

知人 出まんと ひ毋まい 呼ぶ ござりますうどんる傘

でも一枚 おりゃせべ 氣まぶまるとトいるとこ 地ろうへ合

点せ ビ ろへイエ〜 ぐよいうこ モろく 外いまろうこ

ことろうく 歩ろうまいいまりません 今晩い 地ぶまりる

ぶまし へそまいなりぐよ ござりまるがおまへい 結

列ぐよも お宅のごよもも 初まぐ いるふ 信切ふ

おろ ちろくも ろへるまーしんうおろうぐびるさへ

まそのでございませうぐ チトもお 地ぶのなる

宅でい ございませんトいろうこ 極 尚 意味 ろうく

男を法るべたなかりごろ さるくい瓶ゐ だろさ
ま一うるえでも沙汰いるゝゝなんと云ひ迄一の
次のるに生ゝゝめ文句の変色いゝぶ迄ざる
ろ紛れども 三度目一かゝうさゐ祝ぶゝうそのよ
ぬ迄つぶめぬ迄くう迄元色墨の其かひ
ぢに咲るゝで花の枝折のみちまべイザ仏
枝門いて手でぶらゝといひるぶゝ這入善孝が
兵へモ因縁ぶゝいるりえでぶいます 除イヤ迄色い

読孝さえぶゝしてあく 兵へイエ先刺繍の袋ゐ
あること元実いちゝと遠間ゝゝるるとびゝり
今ゝぶるたーゝに北町の且ぶゝくとよゝゝる
に和ゝくさえにお遠ゐいゝゝまぶゐお間ゐかゝらゝと
ぶんぶまーゝぶまイ ちぶーと思枝ゐりぶゐ安ま
ぶゝゝく仏るぶりまー元誠ゐ失礼まぶいちゝ
へいゝゝ善ゐんまーゝト善ゐふゝゝ法迄庵ゝ人来り
善孝ハおまるさふむゝ兵へイ石つ迄まーゝ元北町の

さる何屋何兵衛さんの若旦那めふごぞりまして
私が元人どうぞモシとまつて両家ともに出れば易く
きへ扨やうくそまどやアうまいわくわんに今日の雨
ハトつひさしてロごりる風情そつきぬ男ぶりまことに
大隆よりまして弓ひもまれに厄介義さんどう
ぞよろしくとさがその名も四方ふ笑く世間の廣
き桜川まりしゑ人に双方の為のうくつまびくふ
ふりしゑ源左衛門も心さけ其夜ハちふ酒ふく

翌日ねつくりておきさが母親と近付ふ名対也
しく別まーしがこまぞ元ふーのけめさーくいつーう
結ぶ赤縄のつなぐ和ろも何と中むたなりのの
衣衣わろひ清元まち社のまそばなるふく来ね
夜半ハ二人中よく畳義ねいと松葉のみぞーふ
もたれぬ中と鶯くなりむ色のなどけるさ
ろへ帰さんまきはこうへおのれいろち初る源さんが安
の時を宅くく出るそくくまてそろと祝ひてつんつ

もうく「ようくしの勢ーろてくまくへるぜへうへるぜと
いうくあまくへさん添えの魚をぎうとえてろてお茶
とあげるといへ言もつてぎおお夜食といへうまうにん
もあくうあまくへ伺もまたつてあんどぎやあります
せんうまくへうをもうてあまくへことを私ようあくへ伺へ
ぢう惚れて添えさえよ初めのものとおあるまひでいへいう
トいえるくもうへ赤面うへやくいるる所さんど
わへ私はえるおぢへ少しもなりませんぎへーして

そえるあが出ます。のうまさ私あんぢが氣と
うんざとておどでぢいまた。まくへイニうへ伺までも
添えいひぢく形道がはぎよそまでぢう廓へお出
の時ぢも薄雲えが惚てあるのふ花里さん
といへ十六よあう子と色として大きうぎであつこョ
うへそまへおまくへさん年ハ私ぎうあでもうう
アーうてまとまうがなれば面白うう之まど私
りまうるぶつきーぎううめが伺地氣にいうます

のう　まさ〳〵　それがらどりみらって　却つく男の
恐れ　ものさその　沁拠い十四う十五の　女郎ぐ　ゑて
のかるおいくんよりお客ぐ　えとあるのがいくらもなう
まもそうへイ立　そそ見いそうでも　第一ぐちくしい　涙え
いぼひで　ぐぐいまもまさ〳〵　るぜくうへ　るぜでもまさ〳〵
るふぐ氣にいくみいのぐ　ぐくそう　おいひみわくうへ　猛
ぜうちぐと　うんくやまもまい　まさ〳〵そうおいひで
ゑしとおそぐるよト　ぜうとうくてうよせれべうへ

ヒサく　そんるくうんとうに　ナすくマア　ぜうるーョ　まさ〳〵
ず　うんとうに　ぜいひうへ　うえとうい　涙　えんぐ　よいぐね
ゑ　完少ー　男ぐ　うくくうく　猛ぐ　うくくッて　ぐいそぐと
よんけ　ゑど　まさ〳〵　るぜくうへ　るぜと　いくくかけ　まいぐ
るうれべいくゑど　色ふでも　あって　ぐんいくう
もく　女ぐ　うれて　氣の　ぜとまるるいなるまんと
ぐひまもう　そゑぐくう　涙　えんぐ　めくく　男ぐ　うくいと
氣ぐ　めまいと　ぐひまもハ　まさ〳〵　おうくえの　るぐんの

あるあんとどうしてそんな焼しげ世話お
いひぐらう大そう深さんにそういろく世話を申
ぐらうね〻アレモウ婦さん弱くありろくなぐ云
ますなる何とこちらがそんなみるをいうすりのう
取ろいとばおいひでないよ〻アレサおかうぐんぐん
おまへい歯ホンん氣よるろうろハョトまと
ほんとうにそのおかりでも私はあたりちんぐ
とあれはあないろ氣よかけでないトぐいふ中
よる色なるーのうめ〻く後念みき物うう
いろのろふ中〻深ろ郷深〻そんろう三人一野よ
寝ようくトいとまく〻びろうろ〻アまく〻いろのろん
ろ〻アヲ引私はまとにきりばつぶーとおこ深さん
ぐれ〻今までうまいとおいひどア云ト云
所人下女のお初ハ物ようまろ〻深さんのお土産
でぐざいまたトろべうそうろ方元青七ろりほど
拾ろびろ〻注春亭のろへ元がおまひのを

仕立てうゝ久しくまちかねたるがどういさーまちかねう
ほへとうとうこうこうこと人ばかりまちあーらくるもよいる
何がお出来なさるものうまてーがちとを伝へべ
できるうゝ久しくて志まいるもへイトかろハえて
ゆゝ跡に三人好と同士蒼の花とさくちかの
中に存ーくる喜見城如の浦嶋がいくり立る乾宮
も祈るーくこまふへるまでとろのまろる

第四回

さうすぐ長元春の日もちやなけるいふ酒機嫌
男いそらくうて寐の夢に小蝶の花うげも障
子にうりうらくうさ却おまさおろうハなろうを斤よせ
却初こうハを持たそびせ炉ふうだりう釜の
湯を土びんにうりもうゝにおろうハ添ふ帛の
扇をかけてあるる折前隣の下女庭ぐちより
様例へ来り下女へもこーいる兎拝げませおまちさる
におーいる寄よいまるまるのがごうまちゝチョット

御遊ばしませト　まき「アイヨ　けふハお嬢さんハどうよぞへ
下女「ヘイ　けさしおひよいそうで草双帋をおよみ遊バ
してお出なさいます　そしておろさんに馬琴の漢楚
軍談の三編がまゐりましたらお目にかけまんしを
ろりにどうぞ正本製　種彦先生作 西むらやさん　十編をおかしなさ
まてくださりましと　ろ「ヲヤそふ久嬉しいわへ　正本
製ハさりきお菜さんにお貸申ましたら是をおげ
まんと二筋道をかしてあげ　まき「おくろさん様さんた

かいまんでもおかけておくれよ　おまんどん女気らよ
初や朝日きのへいそくいろもの　丸菜をいれかへて
来てくれるア、そうさ　掛田の地面へもあると　朝日稲
荷と名札が出てあるよト　いひ捨おまきさん出て行
なよふおみかハ源氏節が寐良をそろとさし覗く
もいさしと思へバおつかしく目さかあねせうふかかん
またをうけ三味線をとろく　あのびおまへ細き声
色に清元の節もおほつき凡弾よ　浄るり「　

顔ごろもをかづきまれゆゝしの毛もきものかけよトうゝしろに
ぎりくと立〳〵ものきりかけよ居所立ふまごつた
きつゝと宿るゝ〜と言されて口ゝく 嗤 まつるが
コレぶ 蔭 でゆうちゆうらゝくあつくと抓んで
あるのゞトぎりこみゝ〜おそろが 叔母 涙茶 老婆
異 各 〜ておゞと きろく 強 欲 の 娘 へびつくり
恥 ゝ〜く いろものこせの 悪言 を 添 て 弟 ふきろせ
トと 書 〳〵 アヤ おゞとさん 静 ゝ〜ておくまおきの

用 が 高 ると 見 ろ ョ 〳〵 ち 〳〵 ょ ま ま ん の ろ お 客 よ 三 ん
の ゝ や ち ち ゝ 〜 目 が 覚 ま ろ が 目 が 沸 ま ま ろ が 起 ま
が ち ろ こ る ゞ や ア れ ゝ 茅 〜 宅 へ ゆ ろ く ち ト ま ち ゝ
と ま ま せ る 人 が 来 ま ろ 〳〵 ぼ び ょ 来 ま こ の ゞ サ ろ ち く
ち れ ゝ で ゆ ち れ ゝ の 書 〳〵 今 お ま き ま 夜 が お 有 り
拝 ゞ ま と と 来 に ゆ ろ 〳〵 ま ま ゝ ま ん ま ま く ま ま ゝ 有 り ま ま ゝ
ま ま ま 初 ど ん も 居 ゞ お 茅 ち を た の ま れ ま 同 ち
ゞ 〜 ゞ ゝ も 来 ゝ ゆ ゝ く ま ま ま せ ん 〳〵 十 二 ま の 宅 ハ

最ちでこの男と女人だがりう子笑くこと三しゑ
さるのお祭りの日ふ近付ふ為ふつこけ是ど涙しん
涙ゆわ人ふるで一中ぶを教くくやらうの淋しい
う〜止宿ふよこ世の何ごのやごのと涙切らーくする
いまめ人ぶ田ひ考ごう〜他の娘を引ぎりさんで
こごこと笛ふーく幕武きるのごる大ろ月ふ
いくうといふ後金ふちのうちふらーまさらふまう
子あ子人ゆめっちうるぶごーとちのお宅でそんる

ゆぶ一イヤく言いとふいこ世れへそ是でるけりやア
こんな言ふ考イ拂ろと二人でみるこけがれへこへ
田を行ゆあぜ武行ゆ却やーるぶごでお子ろう
田ひ考ろうて却ぶうちのたふきれへけうやア
ろ〜れへまめ人のるぶごう〜今年でさへ三月きごり
ちう二月きごりとう金武ちうまさらぶがそれい
ちうちの拔月ごう〜仕方ごれへまあへきんナイ
狸寐いる武ちるまちうちやアいうれへト涙注形を記

きゝ人おそろしかるふもなかれね共人こゝろ〳〵に
さえけーかくれくそまゝにおもきさまの出来るんで
ゐるく私を世話をするの何のといふ人お方でゝ
ゐる微ふもりおまへのどくるなりー一所ふまいろう
もり婚姻してそんな悪推るゐる所ふどよくご
さいまー　なぜ　さにどうきやるゐ世話ふゐるれくけ
ばやア　只ゐぐさ及まるのっぐ〳〵ばうわたての宅の
姉さえも面よ似なのいるくはいくの者イ人ぐ大ゐのの
ゐるとと嫁をうぐどりえで金まうけを者ト人とと
あまり出のいて女ぐトコりけべおろの浦ー
コろと一ぐ名こそげよ分をものぐもまべりおた
おまさへおろぐ脊をゐるで　まさへおろさえくアレサ
おろろさえまりとい美でもおえろ目をおまーよく
トよび者をされて心づたなりゐる目も泪ぐみ
おぐろく狗をゐで者ろー笑良生りてお改ゐ向ひ
まろへ姉さえ大きゐ者でもいくーまーくくまさへて

いろをかのうをつくるをやで おだをさえくとおいひゞよ
まへまへぶよいをそうそく孫さえ ひくまさ孫さえ
へまへわんに孫さえいおもどうなりまーをえぶれく
まさへるぶく孫さえのるぶ式差ふでもおるうトいそれそ
おろうへ今ア足る 美のたるーをとまぐくとかるも
洞のさえぶちていとかるーげこ後来るぶきこりぶ
牙のうくをかこち良おまきさもかるく猿ぐろき涙
茶老婆ぶ目ぶをべきりーたるゆくこ るさうーをの牙

のおりーにうぶをべおいやまきるおそろが果敢
あのさりひ泣きるぶおりおて悲ふしぶむ打
こそなのまうるさ式すれべさた影も女好でゆ
さね孫ぶ弟ぬけ足をて庭ぶうりそけと
より方 掾敢ふきのべをそれと手のはくおろ
お政に小ぶうり目くぶ世ーく門ぶ陸みを
ぶーぬけよぬをひうろうり 私おせべ孫アこり
びぶうりーこぶくしてきまをうろうぶおうぶう私

の来るのを見てお出ようと思へどもまたハ思へどもとて
もまた思へ〳〵そんじやうれい先刺小松さえと泊春亭へ
ゆくとたつた此の前へなつてお初どえと逢ふけ
先へ泊つて泊進しるこ〳〵お初どんハまだ
ゆうまいせんさつた朝日さえへまた〳〵まだ爰を
ゑてお出ようお初ハ揚屋町〳〵もつとも多く揚漬紙
とりふ来つてこゝ〳〵へ来ほんふそんでぐべまたこと

なのうなどゝ此花美イ同士ぐそ娘の性根ふく
男の心も大界ハ口ろさ〳〵きハ好まぬものこかて
三人いろ〳〵と浮世話や物のかなそびこ時を
うけとおるとお初もなりて夕仮のきく〳〵ちや
黄昏の時ぐそりゝ隣家の娘ゞ大病ふく
今よしハとふ物淋しけまバかとぞお改ふまく
のひこたうたのこまりけまべたぐ〳〵世話こ
ゑる宅のこう病人とも〳〵ゑれバせうろ涙

沙弗と名づけるにおよんでおぢいとおばあつまと佛ふつまと隣の家へいでおよんでまこと美ぐ二四美とるりのやせん
と姫乳のあんどーに拘つまる春の夜まさてまを
告る初夜の勤の鐘のいとゐもぐ〜と笑へ〜り

黒塚奇談

今様姿

中形三冊

全本六冊

浅草長谷ち境内夜叉神の

寶前へ納めし異形の面

彼黒塚の鬼老婆ぐ
ゆーがりにさも似ぐる
ッ家あーで二ッ髷徒子
女兒のうつ〜ぐ姿成
ゐぐ〜好色男のちう宿
奪ふ強慾ぐ性安達ぐ原と
ゐど近き淺茅ぐ原と

ナルのかんざし

初もゝ〜濡る花の雨その花形の渡〜より法の
伴寺の説法をきゝてゝ家〜ゆゝ繁こさゝづゝ
るゝの文みゝぢるゝぬ北の里頃城なのゝ怖〜き
国果応報の一代ゝ中〜是ゝ他作ゝゝゝりみゝゝゝ
為永ゝ丹減るせ〜當年の新版いのゝ作〜ゝ
よゝ〜高洋新〜

金龍山人 狂訓亭
為永春水誌

吾妻の春雨中之巻

松間花情 吾嬬の春雨 下之巻

江戸 金龍山人 著

○第三回

月下氷人赤縄も〜で一まゝにあゝざるゝ不義淫奔ハ
いゝよ足孤ど男一人を二人わて戀ふ女の貞操ハいゝゝ
差別もあゝむゝ〜妹脊のかゝゝひ睦まゝく對よ
るゝ〜びていとめゝ〜ゝた類もあるゝびあゝ〜くも八重
ゝゝびるゝ支ありやさくもおゝろと添寄いゝ法さゝ

隣の家にゐた跡にゝてうのさゝもりひゝてうゝ
まゝ人ゝ小林の田甫でゝイあの引舟の系
あゝでお国ふかゝてと且那さゝゝとてう
その者に且那をんぞといさゝちやァうれゝくれゝ
そんふちのとゝひゝとんをうてう悪漢よゝゝゝゝ
且ゝて狂文のをんぎ殊ふ相多い武家の酔客他
見もいとゝ濡らるゝ多迷取ゝい国よあひ手ふを
笑人のおゝげゝゝゝとゝさゝべさゝゝ田舎道とい
いひをゞゝあきれゝと奴もあるものゞ財ふゝゝも
あのゝりいゝゝゝゝ物もいひゝふゝさゞおゝゝゝ忘れて
おゝゝひゞゝゝゝゝ此方ハあ且ゝゝ氣色がいるく
あをむゝあゞゝと一人と廣の世界よをゝゝ
演村屋でも梅我でゝゝゝゝゝとそうある
ゝもマアおゝぶりをゝるもゝゞのあるそゝくあの前
の川恩をゝゝれてゝゝゝゝ紙ものでゞゞいゝすゝ
トいひゝゝ添ゝ布の臭をゝゞゞと看眼もゝるむ

女の癖あけくれ悪しきをひとる誠いるぞふ
あゝいとくのうどいとおぼと氣をいよ
まさりてうゝ深げ家も此年月ひよぶ
れて忘れ孫どその先住所も往さたもとで
別れく今あで近まさるる角のうち鬼や
かくどるまあのふおまさと深たるとり
それのそるゝど此家よ世活ふるとやてう
笑ちりればまるぐりとあどらまる信実の
ぶよりまとかへゆくるり後やさたる恋風の
ぞろと素良ふあれさと赤色ドとうた
かくおろはぶよくとぎまろうそう衛
る繻絆の袖とかちりといとと自嘲のの
おのへ深イヤおつるのでとけも何もるれ
でも男のにゝ娘子や女のとそのやうふ
根ちり葉ちりまるまもせど代ろ二三度来る
うちふもおまへの嘆しげでるとたはとぎと代方へ

よそ〳〵しく笑ぬ人をそこなふさまの
きんの業よさうこうぬ世ぎう 機げんの 結方が
よのどぐいますトいふ人はんきう 初恋のわか
あうはなとかあんらー 仮 ナニサ そういふ人はけでもな
いがあんどうどうも笑ひふくかうこうう おうがあこう
おまへ不ふ〳〵しく笑ふと そうく居さのさそーそ
ア おまへのうちの世ぐう 此 画 岸 のうちう久
ろへ分 酒 のかたのまぢもかふよ 剪 解 ぐあうまた

深 ア こがは せんぐんう ろへ さうさアさこー 沢の
横丁で どぐいますと 深 そして 此 ろの 記 報 ぐんかうう久
トいふまこく おこうい 泡 ぐこ ろへ イ立 おとてきんが 息
ぢあ〳〵ここ あるこのお名まへやお宅ぐ ありかり
初見ぐとともおーぐはかやうのおれとやこぐ
ふをれまこあうう 深 そんるうおとてさんいどうぞ
ろきれこのく ろへおこるーやもるるぐーおこぐう
しん分のうへと 深 八テ 独 う 合 ともも他生のえん

みん好信いあるぎとも名いね所で二度三度逢
いぶいふつなね縁ふんことをきるこうい及びず
るぐう力にも〻そ目いせとふうまんおとを
その所深切ふあまへまして深へれまきるゑ〻ふ
お帰〻るまぐ〻おまへふびうこうさるとぐある
そ目ともちぐふう新〻るんが彼是七八年ある
ぐらう八ッう九ッぐ〻おゐ時ぶん稲荷彩道の
藤間へ（文政十年改西川扇蔵と江戸大きでおの今湖多）踊りの稽古ふおうふん

るさるとらう。ゆそ目乳母うまうるひ老女う附て
三味線弾いきうもおら〻とうふいふ元の子で
ふへまやへそ目をぐう〻くおゐえ捨ぐてといふ内ふ
きゆゑ一日を必ず生きもふちゆさ。世の盛衰さい
ひるぐう。去年ふ今年とうりゆくくれぐの薄命
寝衣ふも着ず継ぎ衣を。今ハ美服とロ目ふぐう。
みぐぐうきくも恥う〻く。おゐえゆ孫う漆のうへ
洞の家の玉の法も。絶ぐぎ〻とかちゆ奥源氏

郡ハいとで来く。りゝひ泣しく眼をおもり 涙おもり
さん豊ふ くゝしと云のゝを見人生しゝ。何も
うもらやしひやうふ見ひるさらんが。かるべくもく
氣をもまずふ。とハいふものゝ。今ハ。ぞ いよ
ゝけのおゝ月のゝ二ゝ云へゝ「ア」おくさんハひさゝん
大病ぜん云ハ病身なる 生涯つゝ。そ是ゆゝ 駄馬
町のゝ世も。奉公人まろせふきくおくうち。ぞん
沢の九郎兵とゝまるものが。引負をいゝしく

ぞおもち。二年ゝろたくゝるいうち二度の丸ゆけ
二度目のゝハいおゝさんゞ。ゝくゝり生しゝと菜
礼の雑費や隙時の勘弐が重重それゝ隠
伝兵衛道具まで賣拂二軒の庫も他人ゝ渡し
皆散乱ふ。ゝと月のゝぞぎ。お取ゝいとゝゞゝ
そ是ゝゝ次第ゝ仕わせゝゝく。殊ゝ江戸ふい
一家もゝく。おゝおゝしゝて去年の春流山の
祝狩へ。ゝゞゝゝゝ云ゝとゝゝふ。ゝゝゝゝ

かゝり道。お世話ふるつて小梅の引舟へ
しも說諭さるへ来請のうり舟。そこやうま
女児れと。もつとこれどその時い。ぞうも考へ
ぢつあんぞが。弱て女ゝく考へると媚沢町の
伯父の所ゑ居と対分。ちよく〳〵えうけとま
ぞつけと。ぞひ出〳〵とも深ん縁でいるいろ〳〵
〳〵まとふ〳〵おのおぞえのよいうましん
おんでどざいます。〳〵おそくさんのおるへ
ゐさとのハ〳〵去年の十月でどざいますが。世
ゞ世の時であらふるゝ。出入のものやゝ佐ゝひ
人ゐるゝの野をおくうが。出来ものを其
ときハ。今ゐ根岸のかり住居。そこゑ伯母
と同居のつゝさ。弱辺のお寺までおくりそ
ゝさい近所のお方がたゝと三人いろふまゞ
ん暮しでも。男の子の跡ゝうが。あつて江戸の
ゝちふ住つく居ゝ。ぢうふ淋しい葬礼い

あるまいと。思ひまーしうあんまりかるーく。
うちくもみよいあたがらでも。まのようにみてえ。
ろくーおひ細うらうと。思べが対もよもあるまま
甘ど。伯母の呵るとかなしげふ。法貝ふくお寺
まで。ようーげ送るそのかるーさ。殊小へ途中で
暴雨降へもうーあとをお帰りでるん。今やさてえ
泪ぐとわまるうへほんふまーとちとげ。さぎ
おうげーとうあされませうト顔赧らめくさー

うづむれ。むのうちでぞうぞーく。えるお人ふ
身をわざれ。一所よらくーとものるべ。女子よ生
まーー一生の。本望うまれどおはさがまて。人譬
死ぬわどもくべとく。恨てさるね義理ぞとへ。
まれまくうげーあやわくるよ。思へきーまね煩悩の。
犬の法要とふうふ笑え。さや安楽寺の後
夜の陸。ろうーくとてねがるきく。心苦ぐ久
おそけまべ。さとぐ二人いまつ居つ。ーくびー開く

平川蔵

さきど戸折戸。梅が香おくる春風も。身をきぐと
おぼえける

○第四回

さてもその夜の子の時頃。下女のお初へ隣
より。そくさなる勝手ぐちへおろさんへ
さてお淋きうございますと奥へきたらーが。
深夜六郎のうかとこそきたへ
驚くおろり拵ーきたらう。おまきさんが

そうおつきあいまた。どうもm病人が。とうぞそ
ごつくお出なさいまとろう。完すこーいてて
かりますうう。おあとも おろうさんも。おさたへ
おきづまうあさいまーさ。おつきあいまーとろすや
そうう、もう九のどのふ。まどおろりでまいう、
ゆへそいつ大変ごとろへおあとおろうさんといへ
おねあまがあるうおたのまやそうどやあいまさ
ねーくへまいけまど。おまきさんとこくーい

もうくどんなごろうとやしめを。お袋さまが
りゐ病人をお按トるすッて。おろく泣てお出
なさるし。女ちうい盆間にゐ家へまかりて四く
ちぼこ〳〵ふさぞとまるごらうよ。そ〳〵く
おしいおむすんこまこ〳〵大ぶふよいかうでござり
ますを孫〳〵に髪顔の娘にさえごそうざの
ちこ〳〵ハイよくれぞんごと。おみろさえへ誠よ孫さえへ
むだがありませんョいらちよくッてもまさ

さえやおこうさえよりの孫いうこ。おえまりおま
をおわくるさうまそるる。トリやお床をのべく寝
ませうト乳がるる下女のこうまへ。一間へちく
や三布ぶらん。三所ゐるべて九ッの苦労の稽う
郡門も。太織も一ッ夜具ゐるで。中よ隅て
おまさが床。右ゆおこうを左とふの添次郎が
枕をおゐたサッちやくおこうづまをといひて出光
ぶせるをとうた〳〵おまきさえのおかうまで

氣をつけやてくださいまーヨト笑ひ身して
やくゆくさるもの二人いのちらくと。寐も弱まれ
床のうへおそうさえおきへ寐ん。ひとさーげ
きをつけくおきてあるうまへイエおきて
よりまーる孫へまくまつぐ寐ん。ふとい
うへいふ遠慮のおりこそあま。まぐ机寒死春
風の。ときこるをとりて吹らく雨ふだらく
雨の中と。いと物凄き夜中ま。ひぐそくも

拍鼓ドシチャンく迷子ヱアリく。とぶ蝶きこそげう
さえふ。めうへあるも出のせる名まへこそいよト抱き
ぢく。孫に郎も寐うと。ひぐふかくそ脊中を
さすり孫へるふ遠くぐうとうくいきいよトいく
ぐおうへおいくぐ。先つきーまれべ。孫
ぢ帝も詮方るうく。ぢぐうく夕抱ーく居うーげ。
菊之丞と梅我を一ふせー。娘盛のおみをを
いぐそ。隣へ遠く外ふまと。人も嵐の拙ごをを。

あるべきさま世のとききこえけり。嗚呼いとせん
二人が中。いづれも其性貞実ふて。よく世の義
理を知るのみなれど。おのふいとりて雖うきこ情
欲とまるり給ん。天さの美人美男をよせく。患
苦の種を蒔るのう。かるくびも今のはよ絶
てるーといいつべくるぞ。若た息子や娘にと。のち
る人へたれとも。他の浮薄やいとばらも。
のべ是ごとるたこけ四つ。逃もかく是すするあく

えと。推量ありく特ーるるく。良是をあるい
是ぞ。人道の通とらべし。現ふも短
つき春の夜の。いつーう市けて椽側の。障子
ある日もゆうはく。下女のおそろい次の間
より。おいらさえへ。宮でどざいまこヨ
トいとまくおころい用をさまーーれべおまさい
まぞ。ひとらどこのオい男よ深寝ーて。ろいを
ー賢の。まるぞ髪ちどけ。ありふうまげ。ーく

まつさきあかるぬ源次郎が。眞を覗て きつと
記。隅紙 あけく次の写へ。ぞうやら氣
味 ひろく ミハへおまつどん姉さんへ ろへおまつさ
さんハさくぞんさうく おつうまさいきせん ろへ
そうくへそくあまへいろ おかりざくきへ ひさ
ハ今教あけかふかりきーこ ちりと 先刺
お記ーやさうとぞんーきーこけまど。あんきり
よくお寝ておいる ゝゝとそまておろハ

ぎろくと。掏ふ おうりをこれきへ ろへお初
ぐんひさてハふ。ゆへ迷子ぐ まて誠ゝ
くろく そまくッイ 源さんのそばへよろづる
トいへも一せ急令ふ。ひびきろ 娘氣の。
ぶても初ゝ ろ上ろへトおそろふゆく さね
ぶりちろ ろへアレサ おころさん迷子ぐ来ゆうが
雷さんぐ おろうらうが。何さらうがかさらうが。
源さんが居まべく おやまあきせんぞーく

おまへさん。ひぐらしおとろづるめをするやうぢが
もおとろもそんなふ犯暮ぢやありません。
まつこおまきさんも姉ぶんをやくやうな方がある。
稽ふ蒲鉾のおそをたのんで。醫家へ止宿いな
さいませんといとろくわどるれおとやさえ。あんど
らまとろ一ツ疲れ。二人ぐ寐ろる姿さえ。おとろふ
えんぶめられ〜と。どういひつけも行灯海士
ト舟のかぢをとえ。八重の夕路をくでよ

風情。粋なおとろもとりてまへるんで
ぢざいますおとろさん。お家のようといもれぢぐ
ある。ねろぬ良〜くおいでるさいトいひるぐら
えろく西紀深次郎ぐまろうりと。まへ深次郎。
さん夜お月成ます。深さへく〜まくまるふ
おはろ豆ろとろとそうで白川夜毎ざトい
えれてやろく〜月をさるし深イヤ豆ろ大造
ふ寐れまとれとまへお寐ろれるされるでい

湖月抄

一雙玉手千人
楽ハ堂城遺
貞幹画

平川舎蔵

ござりますまい。今おそうまいらうとひ
まづ〳〵いんべ（ほへ）そうでもあるろ〳〵ござ
ゆんべ寝（ね）ぐーしてまへお寝（ね）ぐるしいも
るいめど。きつーおひるりでおそうとちづて。
あんまりくるつたあつくおいでるされ〳〵
トいひて（つき）次へふげてゆく。いたのまふ（ま）ぬ宅（ど）
のおまさ。中（なか）の間（ま）うら出（で）きてり（ま）へゆんべ
かんかんるさいまーよ。虚ふ（ぎ）改（ぐ）ちうとぞんーどて

まるッきり（ま）ノ汽（き）ちうらを。とう（き）まで
ひるうを（ひる）させらを（ま）まーよ。まろやゃ（よ）まやく
（ひる）昭の赤（あか）ちくとしるョ（よ）おろうぎんくトほ（ほ）
むを（ま）〳〵ことづく（えん）様（さま）ばより（ハイ）まへ（ハイ）たづ（ま）今（ま）
トるをトをきるぐ（ま）まり（き）まへ姉（あね）さんいた
のまふおかりでございます。昨（きの）晩（ば）へさぞ
おれ（れ）もへございます。ちらう（き）〳〵エおまへ
ごそ寝（ね）むうさらうよ。ちやくも寝（ね）ちら

よろこぶ和ゞ家るまで。孫ぞふおいでゞ
そう ゞろけ。ゞ お床をあげるうち多傳
ておら見ト孫次郎が夜具を手むも光
いおまさゞ夜具をたゝみうけゝが ろ〳〵ろん
ふおるさのいゆうしく和たませう。ちゆと
おゆまさるさいまゝゝみ きゝ〳〵ゝ 多寝ん
まいゞ。ゞ孫さん チット そちく おりでゞ。何を
ゆゞく きて居るのゞわゝトいゝをりうう

臺所ふく ろ〳〵おろうえべくまゞかりみ
ゞゞ おまを。まこゝ おゝまりまろてゞ
さいまゝ ろ〳〵ゝ ゝ ゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ ゝゝ
うゝ孫ろゞを ゝゝふく ゝゝ ゝゝ ゝゝ
ろろさんの髪のみゞれとるか。ゞうゝく
ゆゝべふうぎろて。寝ゞ像がろるかうゝろう
ト孫次郎が夜をろる。孫次郎いきのね
ふうふく。ふゝふにゆれうるをよびゞめ。

まき〳〵源さんお師匠様へお豆が効よろく
いさ〳〵まいりまして。お師匠が百んとうふさあるひ
そうぞ撥柳くらい蒲鉾ひよりよるきひまし
と笑ひちぶらいく〳〵と源さんは平蜘蛛みて「ほく
ねむいく〳〵と云ちぶらい小用よりもくをまこよび
かへ[illegible]にの猫よ紅がつらくあるう。
よくおあらひよ。まつやおまちがいんで
あるう〳〵まつ〳〵お湯をくんでおれまし。と

●源さん帰ハびつくりして。なるほどねびゆくにの
ことをふくおまさまこうひ出し〳〵まさ〳〵ゆくし
きろいろ〳〵ね。そんなふうろ〳〵えくにのことを
ふくるもるいのんど。何ふも知てゐません。
そんなものつらとおぼえがあるのうへト氣
をつけられて源さん帰。まもなく その府の男ガ
こうく源さんおぼえハあんが。おまへがそうらふう
ふうとのど。何の ぢう きくもわへとをト らへが

おもさいあれ出しく。筆ひ[illegible]く糸のう
ん底 ほれとその人が。おもうと流寝さ
らうと。ふへど最痴をいひ出さど。さうそ
ちゝぬ貞も せど。いつかそをしやのあづり
でも。かう女子が他ふもあるか。おやうあく
好漢子。嗚呼感ぜべー おもさが むつしの
賢女子 井ふ べたう

○

風 あけば おきろ ちゝ波立田山
夜ま ふや 長が ひとりゆくらん

○

つとも ちう泣てぞ人ゝ恋ら
今も夜 ぶうよ 青代のそぞ ゆく
せ詠せ〜貞操の女流といふ。ふへ
いてまさるべー。巻をえらくの娘れ ちち
を氣をもて 信実よ。情をくむものゝ

らべ。おもきさおみつふ　ふるまひ　びて　きこと　ふ
美人（びじん）といふべし

吾嬬の春雨　下之巻終